

小学校第6学年 社会科学習指導案

小単元：町人文化と新しい学問(配当5時間)

江戸時代の海産業 (1/5)

◆目標

- 歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学とそれらにかかわる人物の働きや代表的な文化遺産を通して、社会が安定するにつれて町人の文化が栄え、新しい学問がおこったこと、新しい学問が次の時代への動きに影響を与えたことが分かるとともに、それらにかかわる人物の願いや働き、代表的な文化遺産の意味を考えようとする。
- 歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学とそれらにかかわる人物の働きや代表的な文化遺産から学習問題を見だし、文化財、地図や年表、その他の資料を活用して調べたことをまとめるとともに、社会が安定するにつれて、町人の文化が栄え、新しい学問がおこったことにかかわる人物の願いや働き、代表的な文化遺産の意味について思考・判断したことを適切に表現する。

◆評価規準

○社会的事象への関心・意欲・態度

- ①歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学とそれらにかかわる人物の働きや代表的な文化遺産に関心を持ち、進んで調べようとしている。

○社会的な思考・判断・表現

- ①社会が安定するにつれて、どのような文化や学問が生まれたのかについて、学習問題や予想、学習計画を考え表現する。
- ②歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学とそれらにかかわる人物の願いや働き、代表的な文化遺産の意味を考え、言語などに適切に表現している。

○観察・資料活用の技能

- ①文化財、地図や年表、その他の資料を活用して、歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学とそれらにかかわる人物の働きや代表的な文化遺産について、必要な情報を集め、読み取っている。
- ②調べたことを白地図や年表、作品やノートなどにまとめている。

○社会的事象についての知識・理解

- ①社会が安定するにつれて、町人の文化が栄え、新しい学問がおこったこと、こうした学問が新しい時代への動きに影響を与えたことが分かっている。

この単元では、5時間扱いのうちの1時間目に、江戸時代の大阪の繁栄と関連させ、航路の開発と海運業の発展に目を向けることができるよう、資料を少し付け加えました。
1時間の中で指導できるよう、工夫しています。



Copyright © 2008 kids.wapak.all rights reserved.

◆指導・評価計画（各時間）

本時のめあて	○おもな学習活動・内容	◆指導上の留意点	☆評価計画
<p>①江戸や大阪のまちと人々の暮らし p. 90~91</p> <p>江戸や大阪のまちの様子やほかの資料をもとにして、当時の社会について話し合い、学習問題をつくりましょう。 (1時間)</p> <p>学習問題をつかむ</p>	<p>○江戸や大阪のまちの様子について資料をもとに調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 江戸の両国橋付近は、橋の上や川も花火見物の人であふれかえり、とてもにぎやかだ。 	<p>◆江戸や大阪のまちが栄えていることに気づかせる。</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> 大阪のまちは、経済の中心地として栄え、多くの物が江戸に運ばれた。 大阪が栄えたのは、日本各地をつなぐ航路が開発され、大阪に米や味噌、醤油などが大量に運ばれてくるようになったからだ。 	<p>◆航路の開発による海運の発展と大阪の繁栄を関連付けて気づかせたい。</p>	
	<p>○平和が続く社会が安定するにつれて、どのような文化が親しまれたり、どんな学問が広がったりしたのか資料から調べ、分かったことや疑問に思うことを話し合い、学習問題をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> さまざまな人々が歌舞伎を楽しんでいる。 役者や風景などを描いた浮世絵という多色刷りの版画が親しまれた。 どんな人たちが歌舞伎や浮世絵で活躍したのだろう。また、どんな人たちがこうした文化に親しんだのだろう。 蘭学や国学といった学問が広まったけれど、どんな学問だったのだろう。 蘭学や国学で活躍した杉田玄白や本居宣長はどんなことをしたのだろう。 	<p>◆平和が続く商業がさかんになり、江戸や大阪が栄えたことをとらえさせる。</p> <p>◆町人などさまざまな人たちが歌舞伎を楽しんでいることに気づかせる。</p> <p>◆当時の文化の特色や、蘭学や国学の学問の内容に関心を高める。</p>	<p>☆〈関意態①〉</p> <p>平和が続く、商業が栄え、安定した社会が続く中で、新しい文化や学問が生まれたことに、関心をもち、どのような文化や学問だったのか意欲的に調べようとしている。</p>
<p>学習問題 平和で安定した社会が続いた江戸時代の後半には、どのような新しい文化や学問が生まれたのでしょうか。</p>			



Copyright © 2008 kids wing, all rights reserved.

青色の部分が、海上輸送に関連する内容です。
 この単元では、1時間目の初めの資料「大阪の港のにぎわい」と関連させ、当時の航路の開発による海運業の発展が商業の発展につながったことに関心を持たせることができます。
 その際、河村瑞賢の航路の開発のエピソードなどに深入りせず、航路の開発が大阪などの繁栄につながったことを確認する程度とし、次の町人文化の広がりやの学習につなげるとよいでしょう。
 1時間目の詳しい流れは、6ページにある「本時指導案」をご覧ください。

②人々が歌舞伎や浮世絵を楽しむ p. 92～93

歌舞伎や浮世絵は、人々の間で、どのように親しまれていったのでしょうか。
(1時間)

- 近松門左衛門の活躍の様子について調べ、歌舞伎が、人々にどのように親しまれていったのか話し合う。
 - ・各地の城下町の芝居小屋は、いつも大勢の人でにぎわっていて、芝居見物は人々の大きな楽しみだった。
 - ・近松門左衛門の歌舞伎や人形浄瑠璃の作品は、力をつけてきた町人の生き生きとした姿や義理人情を描き、町人を始め多くの人々に親しまれた。
 - ・近松の作品は、現在でも名作として上演されている。
- 歌川広重の活躍の様子について調べ、浮世絵が人々にどのように親しまれたのか話し合う。
 - ・歌川広重が東海道の名所や風景を描いた「東海道五十三次」は大量に印刷され、江戸からふるさとへのみやげとしても買い求められ、多くの人の手に渡った。
 - ・町人や百姓が、観光をかねて寺や神社にお参りする旅に行くようになったことも、名所や風景を描いた浮世絵が流行した背景にあった。
 - ・19世紀後半は、広重らの浮世絵は海外でも鑑賞されるようになった。

近松門左衛門は、町人たちが好む内容の脚本を数多く書き、多くの人々に親しまれた。歌川広重の「東海道五十三次」の浮世絵も、安い値段で買えたことや当時の旅ブームのえいきょうもあり、たくさんの人たちに買い求められた。②

- ◆近松門左衛門の作品には、実際に起きた事件を題材としたものがあり、町人たちに人気があったことを解説する。
- ◆当時の人気役者の浮世絵が求められたり、美人画に描かれた髪型や着物の柄がファッションの流行に一役買ったりしたことを補説する。そして、当時の人々にとっての風景画などの浮世絵は、現在に置き換えると何にあたるのか考えさせ、浮世絵が当時の人々にどのように親しまれたのか、理解させる。
- ◆歌舞伎や浮世絵は、日本だけでなく海外でも親しまれている文化であることに気づかせる。

☆〈技能①〉

歌舞伎と浮世絵といった文化について、どのような人々が活躍し、当時の人々にどのように親しまれたのかについて資料を収集し、必要な情報を資料から読み取っている。

③新しい学問・蘭学 p. 94～95

蘭学は、どのような学問で、社会にどのようなえいきょうをあたえたのでしょうか。
(1時間)

- 二つの解剖図を比べたり、オランダ語の医学書を翻訳する際の苦労などについて調べたりする。
 - ・「解体新書」の解剖図の方が正確に描かれている。
 - ・杉田玄白らは、どんな困難があってもオランダ語の医学書を日本語に訳そうとした。
 - ・満足な辞書がないため、医学用語の翻訳に大変苦労し、4年の間に11回も書き改めた。
- 江戸時代初期と伊能忠敬の日本地図を比べたり、忠敬がどのように測量を進めたのか調べたりする。
 - ・伊能忠敬の日本地図は、現代の日本地図とほとんど変わらず、正確である。
 - ・伊能忠敬は、当時としては新しい天文学や測量術を学び、それを生かして、全国を歩いて測量し、正確な日本地図をつくり上げた。
- 蘭学が当時の日本に与えた影響について調べる。
 - ・医学のほかにもヨーロッパの地理学や天文学、兵学など新しい知識や技術を日本に役立てようとする人々が現れ、各分野での発展に役立った。
 - ・もっと世界に目を向けて、政治や社会がこのままではいけないと考える人々も出てきた。

- ◆杉田玄白や前野良沢らは、人体の解剖に立ち会った際、オランダ語の解剖書の正確さに驚き、なんとしてもこれを翻訳しようと決意したことを解説する。
- ◆はじめに江戸時代初期の日本地図と現代の地図を比較し、江戸初期の地図が正確ではなかったことに気づかせる。次に、伊能忠敬の日本地図と現代の地図を比較し、現代のような技術や測量器具もない中で、どのようにして精密な日本地図をつくったのかに関心をもたせる。

☆〈技能②〉

苦労して「解体新書」を著した杉田玄白や前野良沢の働きや、全国を歩いて測量し、精密な日本地図をつくった伊能忠敬の働きなどから、蘭学が当時の社会に与えた影響について、資料から調べたことをノートにまとめている。

	<p>当時、蘭学とよばれたヨーロッパの知識や技術が日本に伝わり、杉田玄白や伊能忠敬らの働きによって、日本の学問の発展に役立った。また、蘭学は、当時の政治や社会に対する考え方にもいきまをあたえた。 ③</p>		
<p>④国学の発展と新しい時代への動き p. 96～97</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>国学は、どのような学問なのでしょうか。また、新しい時代への動きは、どのようなものだったのでしょうか。 (1時間)</p> </div>	<p>○国学とはどのような学問なのか、本居宣長は国学の発展にどのような働きをしたのか調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国学とは、仏教や儒教が中国から伝わる前の日本人がもっていた考え方を研究しようとする学問で、「古事記」や「万葉集」の中に日本人の心を探ろうとした。 ・本居宣長は、「古事記」の研究に全力を注ぎ、35年をかけて「古事記伝」を完成させた。 ・本居宣長は社会や政治にも目を向け、政治を行う人の心構えを説いた。 <p>○江戸時代の新しい時代の動きについて調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きなききんが何度も起こり、物価も大きく上がったので、百姓一揆や打ちこわしが全国各地で起こるようになった。 ・幕府や藩に社会の問題を解決する力がなくなってきたことに気づく人が出てきた。 ・新しい学問を学ぶ人や武士の中からも、幕府や藩を批判する人が現れた。 ・人々は新しい政治について考えるようになり、長州藩や薩摩藩などでは藩の政治を改革する動きが出てきた。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>蘭学だけでなく、仏教や儒教が中国から伝わる前の日本人のもっていた考え方を研究する国学という学問も、本居宣長などの働きでこのころ広まった。国学を研究する人たちも、幕府や藩のあり方について疑問をもつようになった。 ④</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ◆「古事記」については、「因幡の白うさぎ」などの話を紹介するのもよい。 ◆宣長は、仏教や儒教は日本人の自然な気持ちにそっていないものだと考え、日本人が昔からもっている「やまとごころ」にかえるべきだと主張して「古事記」を研究したことを補説する。 ◆それぞれの資料から、江戸時代後半の政治や社会が揺れ動く様子をとらえさせる。 ◆国学の考え方が、幕末の尊王攘夷運動につながっていったことを解説する。 	<p>☆〈技能②〉</p> <p>国学とはどんな学問か、本居宣長が国学の発展に大きな働きをしたことについて、資料や教科書から調べたことをノートにまとめている。</p>

<p>まとめる</p>	<p>⑤まとめる p. 98</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>学習問題について調べてきたことを表や短文に整理し、最後にキャッチフレーズをつくって発表しよう。</p> </div>	<p>○学習問題について調べてきたことをもとに、室町時代の墨絵と江戸時代の浮世絵を比べて表に整理し、分かったことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・室町時代の墨絵が、どちらかといえば一部の人が楽しむものだったのに比べ、浮世絵は、町人をはじめ多くの人々が手軽に親しめるものだった。 <p>○江戸時代の新しい学問が、社会にどのような影響を与えたのか、短文に整理する。 (国学について) 本居宣長のような国学者によって、仏教や儒教が伝わる前の日本人の考え方を研究する国学がさかんになった。国学者の中には、幕府や藩の政治を批判する人も出てきて、国学は、新しい時代への動きにもつながっていった。</p> <p>○歌舞伎、浮世絵、蘭学、国学について特色を表すキャッチフレーズをつくり、発表する。 (浮世絵)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人々を旅へとさそう「東海道五十三次」 ・人々の心を楽しくわき立たせる浮世絵 <p>(国学)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本人の自然な心を解き明かす ・新しい時代へ大きなえいきょうをあたえた国学 <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>江戸時代、平和が続き社会が安定する中で、歌舞伎や浮世絵といった町人たちが中心となった新しい文化が栄えた。また、蘭学とよばれたヨーロッパの学問が伝わったり、古くからの日本人の考え方を研究する国学が広まったりし、政治や社会にもえいきょうをあたえた。⑤</p> </div>	<p>◆墨絵との比較を通して、浮世絵が、町人を中心に手軽に親しまれた文化だったことをとらえさせる。歌舞伎と能などを表にして比べさせてもよい。</p> <p>◆学習問題について調べてきたことをもとに、簡潔に表現させる。</p> <p>◆まず、調べてきたことをもとに、歌舞伎や浮世絵が、どんな文化だったのか、蘭学や国学がどんな学問だったのか発表させる。そして、そうした特色を、簡潔なキャッチフレーズで表現させる。</p>	<p>☆〈思判表②〉 今まで学習したことをもとに、近松門左衛門や歌川広重らが町人の文化の発展に果たした役割や、杉田玄白や伊能忠敬、本居宣長が新しい学問の発展に果たした役割や社会への影響について考え、言語に表現している。</p> <p>☆〈知理①〉 平和が続き、社会が安定するにつれて、町人の文化が栄え、新しい学問がおこり、新しい時代への動きに影響を与えたことが分かっている。</p>
<p>ひろげる</p>	<p>■江戸時代の武士の学校 p. 99</p>	<p>○会津若松市にあった日新館という学校(藩校)について調べ、分かったことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・藩校は、藩士の子弟が通う学校で、全国に260以上あった。 ・会津藩の藩校・日新館は水練場や天文台もある大きな学校で、一定の身分以上の武士の子は、10才になると日新館に入ることになっていた。 ・文武両道の考え方のもとで、学問は中国から伝わった儒学を中心に学ぶとともに、さまざまな武道にもはげんだ。 ・武士の心構えを説いた「什の掟」が有名である。 	<p>◆日新館をもとに、武士の子弟がどんな学問を学んでいたのかに関心をもたせる。</p> <p>◆自分が住んでいる地域にあった藩校について、日新館を調べた視点で調べさせる。</p>	<p>☆〈関意態〉 日新館を例に、江戸時代の武士の子弟がどのような学校で、どのようなことを学んだのかについて関心をもっている。</p>

※東京書籍教科書平成27年度用『新編 新しい社会』6年上単元指導計画より

◆本時指導案 江戸時代の海産業 (1/5)

(1) ねらい

江戸や大阪のまちの様子、新しい文化や学問にかかわる資料などを基に、当時の社会について話し合い、学習問題をつくる。

(2) 展開

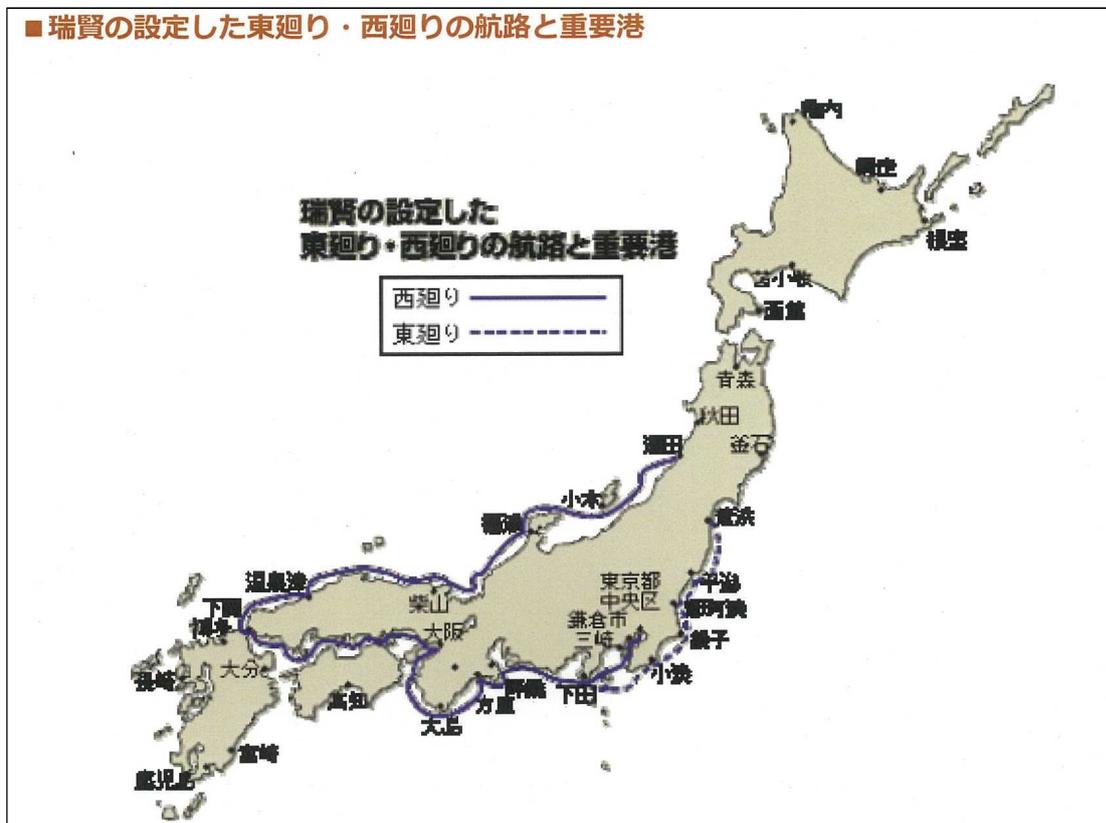
過程	○学習活動 ・ 学習内容	◎資料 ◆指導上の留意点
導 入	○江戸や大阪のまちの様子について資料をもとに調べる。 ・江戸の両国橋付近は、橋の上、広場、川のどこも花火見物の人であふれかえり、とてもにぎやかだ。	◎「東都両国ばし夏景色」資料1
	・大阪は経済の中心地として栄え、多くの物が江戸に運ばれた。 ・河村瑞賢が航路を開発したことで、全国から大阪に米や味噌、醤油などが大量に運ばれてくるようになったからだ。 ・航路の開発により海上輸送が発展し、日本の各地の商業や産業が栄え、経済も発展していった。 ・海上輸送の発展により、各地の文化も発展していった。 ・特に北前船のおかげで日本の経済や文化が発展していった。	◆教科書や資料集で「大阪の港を出る船の様子」から、大阪が経済の中心として反映していたことに気付かせる。 ◎河村瑞賢が開発した航路 資料2 ◎河村瑞賢の航路の開発 資料3 ◎「北前船ってどんな船」資料4
	・平和が続き社会が安定するにつれて商業が発達し、武士以外の人々の中に学問や文化に親しむ人が現れるようになった。	◎文章資料「大阪湾の歴史」資料5
展 開	○平和が続き社会が安定するにつれて、どのような文化が親しまれたり、どんな学問が広がったりしたのか資料から調べ、分かったことや疑問に思うことを話し合い、学習問題をつくる。 ・さまざまな人々が歌舞伎を楽しんでいる。 ・役者や風景などを描いた浮世絵という多色刷りの版画が親しまれた。 ・どんな人たちが歌舞伎や浮世絵で活躍したのだろう。また、どんな人たちがこうした文化に親しんだのだろう。 ・蘭学や国学といった学問が広まったけれど、どんな学問だったのだろう。 ・蘭学や国学で活躍した杉田玄白や本居宣長はどんなことをしたのだろう。	◆江戸や大阪では、武士だけでなく職人や商人などのたくさんの町人でにぎわっている様子から、平和で安定した社会でになったことに気付かせる。 ◎教科書・資料集より、歌舞伎、浮世絵、蘭学、国学の資料を適宜提示する。 例 ・絵図「歌舞伎を楽しむ人々」 ・絵図「葛飾北斎の風景画」 ・絵図「杉田玄白と解剖図」 ・絵図「本居宣長と古事記伝」
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 学習問題 平和で、安定した社会が続いた江戸時代の後半には、どのような新しい文化や学問が生まれたのだろう。 </div>	
ま と め	○本時の学習をまとめる。 ・航路の開発によって、大阪を中心に商業が発達した。 ・平和が続き社会が安定するにつれて商業が発達し、武士以外の人々の中に学問や文化に親しむ人が現れるようになった。 ・江戸時代の新しい文化や学問について、次時以降調べていく。	◆本時に設定した学習問題を基に、次時以降の学習の進め方やまとめ方などについて確認し、学習の見通しがもてるようにする。

資料1 江戸の両国橋付近の様子



国立国会図書館 錦絵でたのしむ江戸の名所より「東都両国ばし夏景色」
<http://www.ndl.go.jp/landmarks/about/>

資料2 河村瑞賢が開発した航路



国土交通省淀川河川事務所資料

資料3 河村瑞賢の航路の開発

● 河村瑞賢

最上川の舟運が発達したひとつの原因として、河村瑞賢による西廻り航路の刷新は忘れることが出来ません。江戸経済が安定してくるにつれ、人口が増加し、主食である米の不足がクローズアップされてきました。そこで米どころの多い日本海を通る西廻り航路の見なおしのため、幕府の御用商人である瑞賢が派遣されました。瑞賢は苦心の末、酒田から下関経由の日本海西廻り航路を確立し、最上川を通して運ばれた物資を、安全に江戸に回漕することに成功させました。これにより酒田は、日本海航路上唯一の拠点として空前絶後の繁栄をみせました。



河村瑞賢銅像（酒田市日和山公園）

写真提供：山形県立博物館

河村瑞賢〔かわむら・ずいけん〕（1618-1699）

江戸前期の土木家。伊勢の貧農から身を起し、土木・材木を請負、ついに江戸屈指の材木屋となった。幕命を受け、奥羽の官米を江戸に回送するため1670年（寛文10）に阿武隈川の河口から江戸へ向かう東廻り航路、1672年（寛文12）に酒田から下関を通り大阪・江戸へ向かう西廻り航路を整備した。

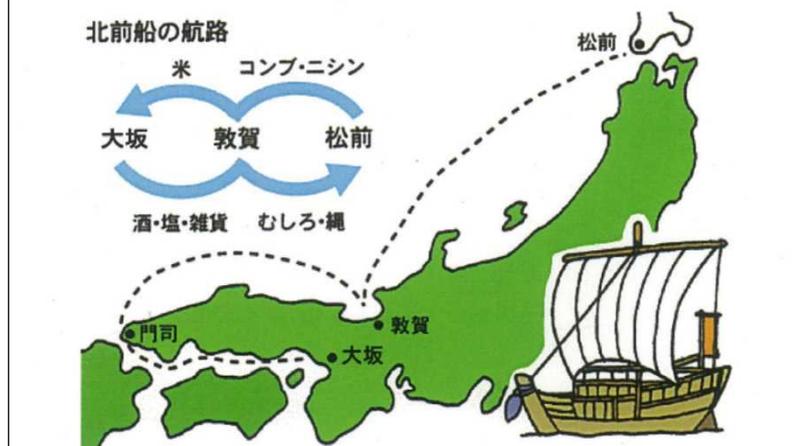
国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所「最上川電子事典」より

資料4 「北前船ってどんな船」

江戸時代には日本海や北海道の港から江戸や大坂（大阪）へ、米や魚などが船で運ばれていました。船は瀬戸内海をとおって大坂、江戸へ向かう西廻り航路か、津軽海峡をとおって江戸へ向かう東廻り航路を利用しましたが、西廻り航路を走る船を北前船と呼ぶようになりました。なぜ北前船と呼ぶのかについては、北廻り船がなまったという説、北前とは日本海の意味で日本海を走る船だからという説など、いくつかあります。

18世紀のはじめごろになると、西廻り航路が東廻り航路にくらべてさかんに利用されるようになりました。というのは東廻り航路では太平洋側を北へ向かう黒潮の流れにさからって走らなければならないため、当時の船では航海がたいへんだったからです。また、西廻り航路のほうが荷物を安く運ぶことができたからです。

北前船としてかわれた船は、当時、貨物船として広くつかわれていた「弁才船」と呼ばれる船でした。西廻り航路がさかんになると、この航路を走るのに適するようにいろいろな改良が加えられていき、明治時代になっても、しばらく活躍していました。



公益財団法人日本海事広報協会パンフレット「海と船なるほど豆事典」より

資料5 大阪湾の歴史

江戸時代の大坂みなと

◆西廻り航路と天下の台所

河村瑞賢は、米を安全に輸送するため、太平洋沿岸を南下し、房総半島を迂回して江戸に至る東廻りの航路を開発した。また、瑞賢は天然の航路である瀬戸内海に着目し、日本海沿岸の港から西に向かい、下関海峡、瀬戸内海を通過して大坂に至る西廻り航路を改良した。それまで、日本海側から大坂までは陸路・琵琶湖・河川を利用するルートが一般的であった。しかし、西廻り航路による輸送は、輸送費も安く、積み替えによる損傷も少なくなり、大坂へ盛んに送られるようになった。このように、西廻り航路は、大坂みなとへの物資集中力を一気に高め、「天下の台所」としての大坂の地位を決定づけた。

◆北前船は海のマーケット

西廻り航路を使って、大坂と北海道を往復する船を北前船と呼んだ。船主が荷主を兼ねて、港々で商売しながら航行する船のことである。

木綿や酒、古着などを積み込み北前船は3月末から4月初旬に大坂を出港し、港々で商いしながら北海道に到着した。北海道ではニシンなどの海産物を積み込み、特にニシンの内臓から取れるニシンかすは、大坂周辺で盛んだった綿花の肥料として取引されていた。8月中旬に出港した北前船は、商品を港で売りさばきながら大坂に戻ってくる。天下の台所と諸国をつないだ西廻り航路。日本海を渡る北前船は、まさに海のマーケットとして活躍していた。

国土交通省 大阪湾環境データベースより
http://kouwan.pa.kkr.mlit.go.jp/kankyo-db/intro/detail/rekishi/detail_p07.aspx